

英訳本BOTCHANの考察 「なもし」の対訳Likeについて

著者	長井 香奈子
雑誌名	國文學
巻	89
ページ	1-15
発行年	2005-02-17
URL	http://hdl.handle.net/10112/1648

英訳本 *BOTCHAN* の考察

—「なもし」の対訳 Like について—

長 井 香奈子

1.はじめに

日本の文学作品が、外国語に翻訳された際、表現の上でどのような問題が生じるのかということ、夏目漱石の『坊っちゃん』の英訳本を対象に考察を進めたい。

『坊っちゃん』は明治39年4月、漱石が39歳の時に『ホトトギス』に発表した代表作の一つである。伊藤整氏はこの作品を「主人公の楽天性、その同情、その無邪気さ、そして他の人物にある日本的な薄汚さ、みみつちさ^(マ)、卑劣さ、弱小さ、豪傑ぶり」という要素を挙げて、「近代の日本文学で典型的な日本人を描いた作品」としている。⁽¹⁾

『近代日本文学翻訳書目』⁽²⁾によると、『坊っちゃん』はこれまで計4名の翻訳家によって英訳されている。そのうち、日本人によるものが、1918年（1963年再版）と、1919年（1922年、1968年再版）に、外国人によるものが1956年、1972年に出版されている。今回私が対象としたのは、1972年に講談社インターナショナルより刊行された、英国人Alan Turney氏翻訳の*BOTCHAN*⁽³⁾である。氏は『坊っちゃん』の他『草枕』の翻訳も手がけており、漱石研究の論文も執筆されている（注1）。また、現在は清泉女子大学教授として教鞭を執っておられる。

さて、この英訳*BOTCHAN*（以後、英訳本とする）には二つの疑問点が存在する。第一点は、原作『坊っちゃん』（以後、原作とする）に、中学生と萩野のおばあさん（以後、おばあさんとする）が用いる松山方言の「なもし」の翻訳語としてTurney氏がLikeを採用していることである。第二点は、そのLikeの使われ方について、中学生の用いる「なもし」にはLikeが当てられ、おばあさんが用いる「なもし」にはLikeが当てられていない、という点である。原作では、おばあさんは中学生同様「なもし」を使って話をしている。したがって、読者はおばあさんが方言話者であることが一目瞭然で認識できるのに対して、英訳本でのおばあさんの発言は、主人公の坊っちゃんの発言形態と変わりなく、「標準語的」に表現されているのである。

それではなぜ、中学生の「なもし」の訳にLikeを用いたのか、そしてなぜ、おばあさんの発言箇所にはそれを適用しなかったのか。この二点について考察する。

2-1. 「なもし」について

原作には、松山方言である「なもし」が多く用いられている。具体的にいうと、主人公の坊っちゃんが赴任した先の中学校の生徒達と坊っちゃんの間で交わされる会話の中に、中学生が発言したと思われる「なもし」が6箇所使われている。そして、坊っちゃんが2軒目に選んだ萩野の下宿屋のおばあさんとのやりとりの中で、おばあさんが発言したと思われる「なもし」は49箇所出てくるのである。原作中で、「なもし」を用いるのはこの中学生達と萩野のおばあさんしかない。

一方、前述したように、英訳本の方は、中学生の「なもし」にLikeをあてた箇所は原文6箇所に対して、5箇所。おばあさんの「なもし」49箇所に対しては、わずか1箇所のみであるという極端な使い分けがある。

2-2. 「なもし」の意義

原作によって「なもし」は松山方言として一躍有名になった。しかし、実はこの文末詞は松山独特の方言ではない。橋正一氏によると発祥地は京阪で、東北（6県全て）、北陸（新潟・福井）、中部（長野・岐阜・静岡・愛知）、近畿（滋賀・奈良・三重・和歌山・淡路）、四国（愛媛・高知・徳島）、九州（福岡・長崎）に分布している。⁽⁴⁾ このように、方言「なもし」は広範囲に亘って分布しているのだが、ここでは原作に用いられる「なもし」について考察したい。よって、『松山地方で話される「なもし』』として以下、言及する。

藤原与一氏は「なもし」は、相手に「ナー」と呼びかけ、更に強く訴えようとして、「モシ」と付け加える複合形であるが、この「ナ+モシ」の形は、2要素の熟合が強大であると解されたために、かなり純化された一体性が認められると説く。これを訴えの推進・展開・進歩であるとして、強調表現の「なもし」が生じた、という。⁽⁵⁾ また、その意義は『伊豫松山方言集』⁽⁶⁾ に、相手に敬意を表する助詞であり、誰も彼もに対して使用するわけではない。長上若しくは見知らぬ人に対し呼びかける最上敬語、とある。その用例は次の通りである。

【松山方言】

アノナモシ

ソーカナモシ

【意義】

モシモシ（呼掛の言葉）

左様で御座いますか

アルゾナモシ 有りますよ
キレイゾナモシ 奇麗で御座いますよ
イタイゾナモシ 痛う御座いますよ

(以上、『伊豫松山方言集』より)

先の藤原氏もまた、「ナモシ」類（ノモシ・ネモシ・ニモシ・エモシ等）の諸変相に、それごとの表現価値の独自性があるって当然だとし、「ナモシ」は老年層の丁寧語になっていること、「ナモシ」類に属するおのおのは、中等度以上の品等の、特定の待遇気分をあらわすものに相違ない⁽⁵⁾、という。

以上のことから、松山方言「なもし」は、相手に敬意を表する待遇表現であり、その対象は、目上の人、または見知らぬ人に対するものであることが理解できる。

では、原作の中学生やおばあさんが用いる「なもし」には、坊っちゃんに対するどのような待遇的意味が存在するのであろうか。

「待遇表現の構造」⁽⁷⁾には、「話し手が「待遇的意味」を結果として表すためには、まず話し手と相手という二人の人間と、この人間の間の何らかの関係、さらにはそれを表現として出力するために不可欠な話し手の心理と状況が存在しなければならない」とある。待遇表現には、タテの関係において、敬意を表すだけのものではなく、皮肉や、ぞんざいな物言いも含まれる。同時に友人などのヨコの関係にも存在し、話者の心理によって、その時々で変化していくものである。そのことを踏まえつつ、中学生と坊っちゃん、おばあさんと坊っちゃんの間にはどのような関係や状況が存在するのか、そのことを次に述べていきたい。

2-3.中学生が用いる「なもし」の表現価値・効果

坊っちゃんと中学生の教室でのやりとりの場面、坊っちゃんが、なめられまいと、べらんめい調で授業を行ったことに対して、中学生が「あまり早くて分からんけれ、もちつと、ゆる〜遣つて、おくれんかな、もし」（『漱石全集』第3巻P.223）、と依頼した際の返答を見てみると、

おくれんかな、もしは生温るい言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つてやるが、おれは江戸つ子だから君等の言葉は使へない、分らなければ、分る迄待つてるがいいと答へてやつた。

六

『漱石全集』第3巻P.223

自分は巻き舌のべらんめい調で講釈しておいて、勝手な言い分だとも思うが、中学生が方言を使って自分に話しかけること、特に「なもし」を使うことに不快感を抱

いている。

佐藤栄作氏によれば、原作の原稿には高浜虚子の加筆・訂正が数多く加えられているが、中学生と坊っちゃんの会話場面での「なもし」はすべて漱石自身の筆によるものである、と報告されている。また、当時の松山の中学生は、共通語と方言を使い分ける事ができたと考えられるため、「なもし」が敬意を表す文末詞であっても、教員に対して常に「なもし」を用いていたとは考えにくい⁽⁸⁾、と述べている。そのせいで、東京から来た坊っちゃんは、共通語が使えるはずの中学生が自分をからかって、わざと方言を用いて接することに、気分を害しているのである。

また、中学生が坊っちゃんを試すように専門外の幾何の問題を持ってきて、坊っちゃんが出来ないことを囁し立てたり、「天麩羅先生」や「湯の中で泳ぐべからず」などと黒板のいたずら書きをしたり、宿直の際のバツ騒動などは、とても相手を敬っている態度とは言い難く、そこには敬語と敬語行動との不一致がみられる。これらの行動を併せて考えると、悪意があることが認められ、中学生は、坊っちゃんに対して教師としての尊敬などは少しも持っていないことが伺える。加えて、共通語を用いる事が出来る中学生が、東京から来た教師の坊っちゃんに対してわざと方言を用いる事は、同じ言葉を話す土地の者同士というウチの意識と、東京というソトから来た者への疎外の意識、つまり、坊っちゃんを「よそ者」とする意識を明確に意図しているといえるのではないだろうか。したがって、ここでの「なもし」の効果は、ある種の非礼を表しており、中学生が坊っちゃんに対して持つ心理的隔たりや悪意を示す働きをしていると考えられる。

2-4.おばあさんが用いる「なもし」の価値・効果

作中、おばあさんの発言と思われる箇所は全部で53箇所あるが、そのうち「なもし」が使われているのは49箇所、その大部分に「なもし」が使われていることがわかる。前出の佐藤氏によると、中学生と坊っちゃんの会話場面での「なもし」がすべて漱石自筆であるのに対し、おばあさんとの会話場面での「なもし」は漱石自筆と思われる箇所はわずか6例で、残りは漱石依頼による高浜虚子の加筆であると論じている。同時に佐藤氏は、「なもし」を単なる文末表現ではなく高い敬意を表す文末表現であることを述べた上で、中学生とおばあさんを比較して、「標準語的物言いと切り替えができない者」(おばあさん)にとって、「なもし」のもつ待遇表現は一元的であるから、同じく松山方言話者である虚子は、おばあさんの会話部分に「なもし」を加筆することが自然であると考えたのだろう、と推測している。

つまり、ここでの「なもし」の効果は、単純に、田舎に住むその土地の老婆が、中学教師として赴任してきた坊っちゃんに対して素直に敬意を表しているのであり、その文末表現に中学生のような他意はないと考えられる。勿論おばあさんは、中学生のような悪意に満ちた行動をするわけではないし、坊っちゃん自身も、おばあさんが話す方言に対して、不快に思っていると読み取れる箇所はない。

以上のことから、原作に見られる中学生とおばあさんの「なもし」は、同じ松山方言での敬語の文末表現を使用しているにもかかわらず、全く逆の待遇的意味があることが明白となった。

それでは、翻訳者のTurney氏はこのような複雑な表現意図を理解した上で、中学生とおばあさんの「なもし」を使い分けて訳していたのだろうか。また、「なもし」の訳語として採用したLikeに方言的且つ、敬意表現の働きがあるのかどうかについて考えてみる。

3-1. Likeの意義・用例

英訳本では、松山方言「なもし」にLikeがあてられていることは先に述べたとおりである。Likeの語義は*Oxford English Dictionary (2nd ed)*によると、次のように記されている。

B adv. (quasi-prep., conj)

7, dial. and vulgar. Used parenthetically to qualify a preceding statement : = 'as it were' , 'so to speak' . Also, colloq. (orig. U.S.) , as a meaningless interjection or expletive. ⁽⁹⁾

(要約)

B副詞 (類似前置詞、接続詞)

7. 方言、大衆言語。挿入句として前述の言葉を修飾する = 「いわば」。また、意味のない感嘆や間投詞のような口語的表現。

ここで、私は 'vulgar' を「大衆言語」と訳したが、もう少し詳しく説明すると英和辞典⁽¹⁰⁾には次のようにある。「vulgar ②〈限定的に〉(上流社会に対して)一般大衆の、通俗の；(言語が)大衆の話す、俗語の」。また、*American and British Slang Dictionary (Revised ed)*⁽¹¹⁾によると、「②adv. 〈しばしば文尾において〉～みたい、～のようだ。」と訳され、例文として「Sue said nothing but she seemed to be very angry like. スーは何も言わなかったが、とても怒っているみたいだった。」とある。

六

このことから、Likeには方言、一般大衆的な響きがあること、また、断定を避けるようなニュアンスがあることがわかるが、米国では、スラングとしてのLikeは文末ではなく文中にのみ用いる。またその位相は若年層で、友人同士の会話において用いられるため、英訳本で中学生が用いるLikeは米国人にとって少し違和感があることを付け加えておく。

とはいえ、英国では文末にLikeを用いることはあり、英文学作品にもLikeを方言として文末表現に用いる例はある。『英文学の方言』で、「Warwickshire Dialect」（イングランド中部の州、ウォリックシャー訛り）として、George Eliot、*SILAS MARNER* の第14章が挙げられている⁽¹²⁾。以下に一部を抜粋する。

“but you see I’m no scholard, and I’m slow at catching the words. (中略) But it was awk’ard calling your little sister by such a hard name, when you’d got nothing big to say, like— wasn’t it, Master Marner ?

—George Eliot *SILAS MARNER* xiv—

この場面はDolly（車大工の奥さん）自身が、自分は学識者でなく、人の話についていくのもゆっくりであることを述べた上でSilas Marner（主人公）の妹のHephzibahという名前を呼ぶのがとても難しくて厄介だとSilasに言及しているところである。廣岡英雄氏は、‘you’d got nothing big to say, like’の注釈に、「このlikeは各方言中に見られるものであるが、すこぶるニュアンスに富んでいる。ある時は前述を和らげ、ある時は強め、また意味のない投入語としても用いられている。ここでは、発話者が批判した後で、そのことを和らげ控えめにいつている気持ちを出している。」と述べている。

他の例は⁽¹³⁾、

“(前略) And the leddy, on ilka Christmas night as it came round, gae twelve siller pennies to ilka puir body about, in honour of the twelve apostles like. (後略)”

—Walter Scott *GUY MANNERING ChapterIV*—

ここは、Ellangowanという土地の所有者であるBertramが彼の新しい事務所を開き、貿易などを規制したことで、自分達の生活を制限されたジプシーが主張する場面の一部である。ジプシーはスコットランド地方から移住してきていることが、第7章で述べられている。

この2つの例からみると、Likeはイギリス地方で方言として使用されている事が

わかる。また、その位相をみてみると、Dollyもジプシーも低階層の身分である。

3-2. BOTCHAN のLike

では、英訳本でのLikeの効果はどのようなものがあるのか。

前述のように、Likeは、身分の低い者によって方言とともに用いられている。また、その語自体に意味はなくとも、廣岡氏が指摘するように、話し手の微妙な感情を語尾に込める役割も果たしている。しかし、当時の中学生は低階層とは言い難いので、翻訳者は方言的な響きとしてLikeを用いたのではないだろうか。

翻訳者は、「夏目漱石の言語の使用から生ずる翻訳上の諸問題」の中で原作を英訳するにあたり、「なもし」をどう訳すかを次のように述べている。

さいわいなことに、「坊ちゃん」の中で方言と言うと、「ぞなもし」を文章に加えることに限られている。まず、これをどういう風に英語に直すかが問題である。つまり、「ぞなもし」と言う言葉には、意味がない。ただ、方言である事を示す役割を演じているだけである。英語で、そういうような言葉がないかと思って、色々、悩んだが、英国の場合、likeという言葉があるのに気づいた。文の終わりに、なにげなく、likeという言葉を加えることがある。アメリカにも、そういうことがあるだろうとは思いますが、ただ、そのlikeは、やや、ニュアンスが違うかもしれない。しかし、イギリスでもアメリカでも、likeを入れると、話し方のレベルが落ちる。Likeを、あらゆる文章に加えると、非常にくだくなる。だから、場合によっては、「ぞなもし」を訳さないで、その文は方言で言われたと言うことを、間接的に表したこともあった。たとえば、誰々が方言で言ったと言うふうに。

このように、翻訳者は方言的な役割と、同時に意味のない語句としてLikeを採用しているのであって、「なもし」以外は方言と捉えていないことがわかる。

次に、英訳本でLikeを用いている箇所を挙げてみる。

坊っちゃんが初めての授業で、べらんめい調でまくし立てるように授業を行った後中学生が言った一言は、英訳本では次の通りに翻訳されている。

“You’re speaking too fast. I can’t understand what you say. If it’s all the same to you, could you speak just a bit more slower, like ?”

六

BOTCHAN (P36,L15)

「あまり早くて分からんけれ、もちつと、ゆる〜遣って、おくれんかな、もし」

『漱石全集』第3巻P.223

‘If it’s all the same to you,’ を直訳すると〈それがあなたにとってすべて同じことであるなら〉である。会話風にすれば「もしよろしければ」くらいになるだろうか。そして、本来ならば、‘more slowly’ となるべきところを ‘more slower’ と比較級を重複させているのは、「ゆる〜」という方言的な表現を表しているのだろう。

また、黒板にいたずら書きをされて、その卑劣さに坊っちゃんが怒り、中学生が反論する場面では、

“Do you know what lily-livered means?” One of them answered, “Yeah, it means getting angry when you’re laughed at for something you’ve done, like.”

BOTCHAN (P42,L-11)

君等は卑怯と云ふ意味を知っているか、と云つたら、自分がしたことを笑はれて怒るのが卑怯ぢやらうがな、もしと答へた奴がある。

【漱石全集】第3巻P.228

宿直のバツタ事件では、

I showed one of the insects to the boys and said, “This is a grasshopper. Look at the size of you and you still don’t know what a grasshopper is.” The boy on the far left of the group had the cheek to try and score off me by saying, “That’s not a grasshopper. It’s a locust, like.”

BOTCHAN (P53,L14)

おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタた是れだ、大きなずう体をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云ふと、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。

【漱石全集】第3巻P.234

以上からわかるように、Likeは「なもし」の訳語として、方言らしさを表すためにだけ用いられている。翻訳者が、原作を翻訳する際に中学生とおばあさんの間に、前述のような待遇表現の差があったと理解していたとは考えにくい。換言すれば、前に述べたような、中学生が坊っちゃんに対して持つ、「ウチとソト」の意識や、非礼さを示す待遇表現的なものは意識されていないといえよう。

三

英訳本では、中学生の「なもし」のみがLikeとしてクローズアップされている。逆にいえば、クローズアップしなければならなかったともいえるだろう。なぜなら、次のくだりを無視する事は出来ないからである。

“You damned idiot! A grasshopper and a locust are the same thing. And while we’re about it, stop finishing every confounded sentence with ‘like’ .

It sounds like 'tyke,' and if that's what you're trying to call me come straight out with it and don't mumble." I thought that would shut him up, but no. "Like and tyke are different, like," he said.

BOTCHAN (P53,L20)

「箆棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。第一先生を捕まへてなもした何だ。菜飯は田楽の時より外に食ふもんぢやない」とあべこべに遣り込めてやつたら「なもしと菜飯とは違ふぞな、もし」と云つた。

『漱石全集』第3巻P.234

“Like and tyke are different, like,” の部分を直訳すれば意味は異なる上Tyke (子供の意) はあまり一般的な語とは言い難く、英語を母語とする人が読んだ際、あまりスムーズに読めるものではないらしい。恐らく韻を踏むことを重視して翻訳したと考えられる。

4.英訳本でのおばあさんの発言箇所の表現について

実は、英訳本でのおばあさんの発言にはLikeが一箇所入っている。坊っちゃんが真剣に結婚したいと思っているから、おばあさんに誰かいい人を紹介してくれ、とお願いしている場面である。

“Serious? Of course I'm serious. I'm just dying to get married.”

“Yes, you would be, like. Everyone is when they're young.” This sally caught me off guard and I didn't know what to say.

BOTCHAN (P95,L16)

「本当の本当のつて僕あ、嫁が貰ひ度くつて仕方がないんだ」

「左様ぢやらうがな、もし。若いうちは誰もそんなものぢやけれ」此挨拶には痛み入つて返事が出来なかつた。

『漱石全集』第3巻P.266

おばあさんの台詞には、後にも先にも、この他にLikeは用いられていない。この箇所のみ、Likeが用いられているのはなぜだろうか。

この箇所は、坊っちゃんが上手く切り返しができずに、苦笑いしているような状況であろう。英文に“*This sally*”とあることから、おばあさんの発言は、'sally' である。'Sally' とは、悪意のないしゃれや皮肉のことを言う。恐らく翻訳者は、おばあさんと坊っちゃんの両者の会話の「軽妙さ」を表現するために、Likeを用いたのではないかと考える。したがって、ここでのLikeは方言を表すものというより

三

は、大衆言語的な、軽いニュアンスを与えるものとして用いられているのではないだろうか。

では、原作での方言話者としてのおばあさんは、その方言を英訳されずに表現された場合、どのような影響があるだろうか。

彼女の発言箇所は、一見すると方言的なところはない。しかし、次のように彼女が方言話者である事が間接的に書かれている箇所はある。

so, copying her dialect, I said that, being twenty-four, I'd like to get married and would she please find a wife for me? "Are you really serious?" the old lady asked.

BOTCHAN (P95,L12)

それぢや僕も二十四で御嫁を御貰ひるけれ、世話をして御呉れんかなと田舎言葉を真似て頼んで見たら、御婆さん正直に本当かなもしと聞いた。

【漱石全集】第3巻P.266

"so, copying her dialect, I said that~" とあることから読者はおばあさんが方言を話している事を掴める。しかし、それが中学生と同じものであるかどうかはわからない。米国では方言は教養がないと考えられ、それを真似ることはその方言を多少馬鹿にしていることを表すことになるのだが、前に出てくる中学生が方言を話していることを坊っちゃんが述べている箇所を見てみると、

Then, just as I was leaving the room, one of the boys came up to me and, showing me some impossible-looking problems, asked me, again in that dreadful dialect, to explain them.

BOTCHAN (P36,L24)

只帰りがけに生徒の一人が一寸此問題を解釈をしておくれんかな、もし、と出来さうもない幾何の問題を持つて逼つたには冷汗を流した。

【漱石全集】第3巻P.266

中学生の「なもし」を直接的に訳さずに、“dreadful dialect”（ひどい方言）と表現していることで、読者は坊っちゃんが中学生とおばあさんの両者に対して持つ感情の違いというものを、知ることはできる。つまりそれは、坊っちゃんにとって、方言自体が“dreadful”なのではなく、方言を話す中学生が“dreadful”なのであると解釈ができないだろうか。

次に「なもし」の持つ待遇表現（ここでは敬意）を英訳本から読み取ることができだろうか。

英語には、日本語のような敬語、例えば「訪問」に対する「ご訪問」や「言う」に対する「仰せになる」といった類の敬語はない。⁽¹⁴⁾ したがって、原本でのおばあさんの発言をそのまま英訳することは不可能である。そこで、おばあさんと坊っちゃんの会話場面を詳しくみていくことにする。

“But young girls nowadays aren't like they used to be. You have to watch 'em. You'd better be careful.”

BOTCHAN (P95, L12)

「然し今時の女子は、昔と違ふて油断が出来んけれ、御気を御付けたがえ、ぞなもし」

『漱石全集』第3巻P.266

これは、坊っちゃんには既に妻がいると睨んだおばあさんが、坊っちゃんに対して「気をつけなさい」と忠告する場面である。‘Nowadays’は辞書によれば⁽¹⁵⁾ ‘these days’よりも改まった表現であるとされ、おばあさんが中学教師に対して用いる言葉として不都合はない。しかし、次の文では ‘had better’ を用いている。‘had better’は、主語が二人称の場合、文脈・音調によっては警告・押し付けがましさを意を含むことがあることから通例目下の人に対して用いるとされている。したがってここでは、社会的立場という観点よりは、年長者として坊っちゃんにアドバイスをしているような雰囲気がある。

次は、マドンナのことを知っているかと、坊っちゃんに尋ねる場面である。

“There's a lot hereabouts. Do you know Toyama's daughter, sir?”

BOTCHAN (p96.L2)

「こゝ等にも大分居ります。先生、あの遠山の御嬢さんを御存知かなもし」

『漱石全集』第3巻p267

sirは男性への呼びかけ・敬称で、目上の人・店の客・見知らぬ人に用いる。ここでは、「先生」の訳語なので、目上の人に該当する。原文をそのまま訳しているが、ここはおばあさんが坊っちゃんに抱く敬意感情を読み取る事が出来る箇所である。

“Good gracious, no! Madonna is what foreigners call a beautiful woman, I think.”

BOTCHAN (p96.L11)

「いゝえ、あなた。マドンナと云ふと唐人の言葉で、別嬪さんの事ぢやろうかなもし」

『漱石全集』第3巻p267

杏

この場面は、坊っちゃんがマドンナという名前が芸者の名前か何かだと思っていたことに対して、おばあさんが訂正する場面である。‘Good gracious’ は、女性語のやや古い言い方で、「まあ、驚いた」という意味である。また ‘I think’ は発言をやわらげたり、丁寧表現として用いる。英訳を直訳すると、「まあ、驚いた、違いますよ！美しい女性のことを外国人がマドンナって呼ぶんだと思いますよ」である。

続いて、うらなり君が、自分から田舎の学校に転勤する事を希望していると思っていた坊っちゃんに対するおばあさんの一言、

“Ah. That, you see, is where you’re very much mistaken. That’s a different kettle of fish.”

BOTCHAN (P117, L16)

「そりやあなた、大違ひの勘五郎ぞなもし」

『漱石全集』第3巻P.282

この ‘you see’ は、後に続く陳述を和らげる表現である。この英文から受ける印象は、相手の間違いを指摘する時、少し控えめに言っているように感じる。

以上の例から、翻訳に際しておばあさんの発言箇所に方言らしい表現は見当たらなかったが、しかしおばあさんの人柄は少し感じられるのではないだろうか。中学教師の坊っちゃんを敬いながらも、指摘するところは指摘する。それは横柄ではなく、あくまで控えめに発言している。

結局、おばあさんの発言箇所に関しては、中学生のように、特定の語句 (like) を入れて、どのような方言を話しているかを表現する事は、それほど重要なのではないかもしれない。極端な話、おばあさんが方言で話しているようがなかろうが、この物語の中身には直接作用しないのではなかろうか。漱石が虚子に加筆依頼した意図は、恐らくリアリティを出すためのものに過ぎなかったのだろう。翻訳者である Turney氏がそこまで考えていたかどうかは別として、おばあさんがどのような人物か（階層、性格など）が読者に伝われば良いというぐらいに考えていたのではないか。

九

5. その他の英訳本での「なもし」の訳され方

参考までに入手可能であった日本人2名による英訳本での「なもし」を見てみると、中学生の「なもし」については、Likeのように特定の語句を用いることはしていない。

毛利八十太郎氏⁽¹⁶⁾は「なもし」の訳語にA-ah?やA-ah sayなどの意味のない

語を用いている。「なもしと菜飯とは違ふぞな、もし」のくだりは、

“Ah-Say or Ah-Sing is a Chink’s name !” For this counter-shot, he answered : “A-ah say and Ah-Sing is different,—A-ah say.”

BOTCHAN, master darling (P75.L5)

と訳されている。こちらも直訳すると全く意味は異なる。「なもし」を単なる方言、つまり音としてのみ扱っていることが伺える。

佐々木梅治氏⁽¹⁷⁾は、「なもし」の訳語にWill you not pleaseやif you pleaseを用いている。原作で「生温るい言葉だ」と坊っちゃんが嫌う、その柔弱さや、敬意表現としての「なもし」が訳されているように思われる。しかし、「なもしと菜飯とは違ふぞな、もし」のくだりは、次のとおり直訳され、脚注にそれぞれの語の説明が付けられている。

~What is your Namoshi ? Nameshi is eaten only when you take dengaku.”

At this rebuff, he said that Namoshi and Nameshi are not the same.

BOTCHAN (P58.L16)

また、二人ともおばあさんの「なもし」については、Turney氏同様、訳していない。

6.まとめ

翻訳者が「なもし」の英訳にLikeをあてたのは、意味や待遇表現からではなく、あくまで方言としての体を示すものに過ぎなかった。また、原作において、共通語と方言を使い分けることができたであろう中学生が、東京から赴任した坊っちゃんに方言を用いて接することは、同時に、坊ちゃんに対する心理的隔たり、非礼さを表現する事に役立っていると言えるが、英訳本においては文末のLikeにそのような働きはない。

英語は繰り返しを嫌う言語である。原作のように文末表現に同じ語句が並ぶのは読者にはとても読み辛いものになり、受け入れられない可能性があるのではないだろうか。しかし、「なもしと菜飯とは違ふぞな、もし」のくだりを表現するために、伏線として中学生の「なもし」は不可欠であった。そこで、翻訳者は、中学生の「なもし」をLikeとして多用したと推察する。一方おばあさんの「なもし」に関しては、訳さずとも物語の内容に抵触しないため、直接的な語を用いず、その人柄や雰囲気や文章全体から表現しようとしたのではないか。この点に、日本語と英語の性質の違いというものが存在するといえるだろう。

六

*なお、本文中に引用した日本語版『坊っちゃん』は全て、『漱石全集』第3巻(1979年第7刷 岩波書店)によるものであり、旧字は全て新字体に改めた。

*11ページ以降の英単語の解釈は全て参考文献⁽¹⁵⁾による。

注1

- ・『The three-cornered world』1968 Tuttle Company, Inc.
- ・『Soseki, Women and *Hininjo*』(『The World of Natsume Soseki』edited by Takehisa Iijima, James M. Vardaman Jr. 1987金星堂)
- ・「夏目漱石の作品に於ける「草枕」の位相」(『文学』50-12 1982年12月)(※大杉正明訳)
- ・「夏目漱石の言語の使用から生ずる翻訳上の諸問題」
(『国際日本文学研究集会会議録』1978年2月)

参考文献

- (1) 研究「夏目漱石」伊藤整(『明治文学全集55 夏目漱石集』1971年 筑摩書房)
- (2) “Modern Japanese literature in translation : a bibliography / compiled by the International House of Japan Library”
1976. Kodansha International
- (3) *BOTCHAN* translated by Alan Turney KODANSHA INTERNATIONAL
first edition 1972
- (4) 「ナモシの分布」橘正一(『方言』5-2 1935年2月)
- (5) 『方言文末詞<文末助詞>の研究 中』藤原与一 1983年 春陽堂書店
- (6) 『伊豫松山方言集』岡野久胤 1975年 国書刊行会
- (7) 「待遇表現の構造」浅田秀子(『現代日本語講座 第二巻 表現』2001年 明治書院)
- (8) 「『坊っちゃん』原稿の「なもし」-『坊っちゃん』論の前に-」佐藤栄作
(『国文学-解釈と鑑賞-』46-1 2001年1月)
- (9) *Oxford English Dictionary 2nd ed* Oxford University Press, 1989
- (10) 『ニューサンライズ英和辞典』1992年重版 旺文社
- (11) *American and British Slang Dictionary* Revised ed
- (12) 『英文学の方言』廣岡英雄 1965年 篠崎書林
- (13) *GUY MANNERING* chapter 6,7 (『SCOTT'S GUY MANNERING with

Introduction, notes, etc.] by R,F,WINCH,M,A, 1926 MACMILLAN AND CO., LIMITED)

- (14) 「日英語表現構造の比較」 一色マサ子 (『日英語の比較』 1978年 研究社出版)
- (15) 『ジーニアス英和辞典』 改訂版 1994年 大修館書店
- (16) *BOTCHAN, master darling* Tr.By Yasotaro Morri Tokyo. Ogawa Seibundo, 1918
- (17) *BOTCHAN* Tr.By Umeji Sasaki Tokyo, Shunyodo, 1968

(ながい みなこ / 本学大学院生)